

ごごみ日和 59

特集：『Deまち』、心と心が出会う場所
～応用芸術研究所所長／河和田アートキャンプ・
京都Xキャンプ総合ディレクター 片木孝治さん～

ごみ減量会員さん訪問記「ごみ減の会員さんってどんな方？」：

有限会社ひのでやエコライフ研究所
大関はるかさん

新連載

なごみ日和：KBS京都 アナウンサー 海平 和

コラム：これっているかしら？

ソーセージの2パックセット

活動報告：未来フェスタ京都

科学×エコ ～未来は自分でつくる～

地域活動レポート：ごみ減量こそが、おもてなしの基本
～今熊野地域ごみ減量推進会議～



作り手の声に耳を傾ける。

頂いた人の喜びが作り手にも届く。

互いの心が通い合う取組が、いま商店街で始まっています。

日本の風景が、ここから変わります。

写真 西馬晋也（応用芸術研究所）

「ごごみ日和」は、京都市役所、各区役所・支所のエコまちステーション、
京都市図書館、京都生協（市内店舗）などで手に取っていただけます。
最新号・バックナンバーもウェブで公開中！ <http://kyoto-gomigen.jp/>



手をとりあって ごみを減らそう！

京都市ごみ減量推進会議

🔍 ごみ減

検索

『Deまち』、 心と心が出会う場所

～応用芸術研究所長～

河和田アートキャンプ・京都Xキャンブ総合ディレクター

片木孝治さん～

賀茂川と高野川が出会い、鴨川としての流れが始まる場所、京都・出町柳。江戸時代には、京都と若狭を結ぶ「新街道」の入口として栄えた由緒ある市場町です。歴史に囲まれた出町商店街の一角に、『Deまち』はあります。広い板の間の空間に、隠れ家のような、不思議な魅力がいっぱい詰まった『Deまち』の誕生秘話に迫ります。

※Deまち…関西の学生たちが参加するまちづくり活動の拠点であり、都市農村交流活動の拠点。

合言葉は“2R”

片木さんが商店街に関心を持ち始めたのは2000年。伏見・中書島繁栄会の皆さんと一緒に、地域の賑わい作りに参加したことがきっかけでした。2007年からは、京都市こみ減量推進会議が提唱する「2R型工コタウン構築事業」に関わることになり、榊形事業協同組合の皆さんをはじめ、京都精華大学の学生たちと共に、どうすれば買ひ物の時にこみが少なくなるのか、また地域に根差した商店街の在り方などについて真剣に議論を交わしました。夜遅くまで、膝を突き合わせての話し合いの中で、商店街の皆さんとの信頼関係が生まれました。地域の人々がどんなことを考えている、どんなことで困っているのか。そんな声を集め、新しい暮らし方を模索した経験は、その後の片木さんの活動の礎となっています。



片木孝治さん

若者が気軽に集まれる拠点を

応用芸術研究所では、福井県や京都府下の過疎化が進む地域と協力して、それぞれの地域に若者が集い、もの作りや農林業などを通して共に汗を流し、生産地の声に耳を傾ける活動を続けています。福井県鯖江市河和田地区での活

動は2005年から「河和田アートキャンプ」として、また河和田地区での活動が京都府農林水産部農村振興課の目に留まり、京都府与謝野郡与謝野町（2012年～）・南丹市美山町（2013年～）にて「京都Xキャンブ」として結実、更に多くの人々を巻き付ける活動に成長しています。しかし、活動の規模が広がるにつれて、一つの課題が出てきま

した。プロジェクトに参加する学生たちが、気軽にいつでも集まれる場所が必要となったのです。そこで、榊形商店街の出番です。シャッターが下りたままの空き店舗が、若

生産者と消費者の懸け橋に

今、片木さんが力を入れているのは、大型スーパーでは手に入らない、小規模の生産者による知られざる名品を商店街で紹介し、その希少価値をきちんと発信していく仕組み作りです。人手不足に悩む生産地に若者の目を向けるだけでなく、その地域で採れた特産品を消費者へ紹介し、経済の活性化も図る取組です。生産者の声を直に伝えながら、かつ豊富な品揃えが出来るのは商店街の一番の強み。昨今、対面販売の良さが見直され、それを楽しむ消費者も増えてきました。「こだわりマルシェ」と名付けられたこの取組は、生産のプロと販売のプロを繋ぎ、更には消費者への懸け橋ともなっています。生産地の田畑や山林が荒れると、その歪みは災害となって都市をも襲います。「ただ

変幻自在、憩いの場

人と人との繋ぐ『Deまち』の可能性は、そこを訪れる人の数だけあります。こだわりの商品を販売するだけでなく、料理教室にも、ライブハウスにも早変わり。もちろん、若者だけの場所でもありません。子どもたちが、お父さん・



商店街の空き店舗を、自分たちの手で居心地の良い空間に。内装は足場の坂や車道を組み合わせて、組み替え自由なインテンティブなことを軸として、また素材として活用できる木材の、まさに究極のユース！

者が集まれる場所に生まれ変わりました。『Deまち』の誕生です。

わりマルシェ』は、都市部に住む人々が忘れてはいけない、生産者への感謝の気持ちにも気付かせてくれます。



『河和田アートキャンプ』でのひとコマ

お母さんが、そして地域のみんなが集まれる、そんな憩いの場でもあります。どうぞ、新しい発見をしに、『Deまち』を訪ねてみてください。

片木さんたちによって『Deまち』から発信される地域再生、まちづくりの試みは、これからの日本の風景を変えていく可能性も秘めています。

『Deまち』

住所 ▶ 京都市上京区一真町67

E-mail ▶ info@aat-b.jp

（「こだわりマルシェ」をはじめ、イベント情報やお問合せは、E-mailでお願いします）

『出町榊形商店街』

京阪電鉄「出町柳」駅から徒歩7分

ホームページ ▶ <http://masugata.demachi.jp/index.html>

松村善代子（平成26年2月12日取材）

古着が感動を呼ぶ 不思議なマーケット

「手放すよるこび 作るたのしみ。
それはお金で買えないもの。」

有限会社ひのでや
エコライフ研究所
大関はるかさん



手にしているベストは、お母さんが38年前に着て
いたもの。着ているのは新しいワンピースは、おはるさん
のもの。服への愛着がこの服箱につかっている。

お気に入りだったり、もう着なくなってきた洋服たち、クローゼットやワードロブの中に眠っていませんか？
思い入れのある洋服をごみにしてしまうなんてしびえない。でも、もたらしてくれる知人もいないし、フリーマーケットに出店するのは、なんだか手続きが難しそう。それに、ずっと売り場につづける時間の余裕がない……。このような悩みを持つ方は、きっと多いでしょう。
そんな悩みがゆるい気持ちで解消する、楽しくて、ちょっと不思議なマーケットが開かれました。誰もがもってカジュアルに「捨てる神」「拾う神」になって、心と心を通い合わせながら洋服に新たな命を吹き込むという催しなんです。

「鏡がない」「色で分ける」常識をくつがえすファッションフリーマーケット

今年1月25日(土)・26日(日)の二日間、壺町学区周辺にある施設「あとえミノムジ」「ソーシャルキッチェン」「HINAYA KYOTO」の3か所を股にかけた、ユニークな催しが開かれました。イベントタイトルは「*Free Flea Market (フリーマーケット) ~捨てる神と拾う神~」。これは、もう使わなくなった洋服やファッションアイテム(帽子、カバン、靴、マフラー、手袋)を通じて、手放したい人ともらい受けたい人が交流する楽しい衣料品交換会。過去に京都市内のさまざまな場所で開催され、今回で4回目を数えることに。そして壺町学区周辺では初の開催となりました。

*Free Flea Market (フリーマーケット)……Flea Market (フリーマーケット=蚤の市)に、Free (自由=無料)を付けた自由で無料のフリーマーケットという意味。

実はこのフリーマーケットには、あなたのフリーマーケットにはない画期的なポイントがたくさんあるのです。まず会場に入っただけで「鏡がない！」ということ。洋服を扱う催しには、本来なくてはならないはずの鏡。鏡がないと似合うかどうかかわからず、困ってしまいます。それなのに似て鏡を置かないのは、いったいなぜなのでしょう。このイベントを企画した有限会社ひのでやエコライフ研究所の大関はるかさんにお話をうかがいました。

「私は以前、デンマークに住んでいました。デンマークのデパートのファッションフロアは、ブランドではなく色で分かれていて、これがとってもおもしろいと思っちゃったんです。そんな思い出の光景をこのイベントに活かしました。いろいろな色の服が混ざって、ぐちゃっとなってたら、もううんざりしちゃ

インパクトのある体験をしてもらい、記憶に残る一日を過ごしてほしい

無料といえども整頓には気を配られ、会場はとても清潔な雰囲気。
「時間が経つとどうしてもディスプレイが乱雑になってしまうんです。そういう場合はスタッフが入場者も一緒に片づけていきます。【お客さんと呼ばない】「いらっしやませ」と言わない」という点も徹底しています。みんなでひとつの大きな作品を創りあげているという気持ちでやっています。そういう点で高校の文化祭に近いですね」



ワークショップ風景

文化祭といえば、男性ばかりの芸アートユニット「押忍！手芸部」によるワークショップにも関わらず、思い出たままの洋服は切り刻まれて小さな「えぐざいる人形」

ないですか。無料だとは言っても、ほしいという気持ちにながらないと、誰も手を出しませんから」
服や小物を合わせる際に、色による類別は大いに助かります。シンプルなアイデアですが、意外と誰もやっていない。目のつけどころが素晴らしい。

となって蘇り、子どもたちは目を輝かせていました。手放された洋服たちは手芸アートの素材として新たな命を宿したのです。
「単なる洋服の交換会ではなく、インパクトのある一日を過ごしてもらって、永く記憶に残してほしい。ワークショップを開いたのもそのため。第一回目もフリーマーケットで、会場にサウンドボックスを置いて演奏しました。参加者の中には「生でクラシックを聴いたのは初めて」と涙ぐんでいる方もいました」



押忍！手芸部の作品

古着を通じて、お金では買えない感動を呼び起こし、楽しかった記憶を共有する。大関さんが目指すところは、きっとそこのだろうと感じました。

地域の人々の理解がイベントを成功へと導いた

さて、この「Free Flea Market (フリーマーケット)」は、京都市ごみ減推進会議によるごみ減量モデル事業助成金を受けて運営されました。そして壺町地域ごみ減推進会議の会長である織田英夫さんの「若い人について行こう！初めての地域の人、子どもたちが喜ぶことをしたい」という理解と寛容さがあったから、この斬新なイベントを成し遂げることができた。大関さんは言います。

「織田さんは年末年始のごみ収集日の変更案内のときに、このイベントのチラシを全戸に配布してくださいました。あと壺町児童館の館長さんや壺町小学校の山田校長先生に顔をつないでいただけたり、チラシを全児童に配ってくださったり、地域



フリーマーケットの様子

で知恵のある方、ネットワークのある方に、事業の説明をしたり、スタッフになってもらえるよう願っていただけなのに、こんなに楽しかったですね」

地域の人々の理解と取り組みによって、手放された洋服、ごみではなく「みんなのもの」へと変わってゆく。イベントを大切に、丁寧に「お作りになられている大関さんに、改めてそれを教わりました。次回開催は未定のことですが、今後も目を離さないムーブメントです。

有限会社ひのでや エコライフ研究所

家庭での環境問題への取組を支援することを目的に設立された有限会社。家庭で省エネやごみを減量するためにあったり、環境問題への取組を進めたいという方へ、ごみ減量に関する様々な情報を提供し、環境負荷の少ないライフスタイルを定着させることを目的としている。簡単にエコライフ研究会ができるスマホアプリの開発や、自転車が発電できる装置のレンタルなどが話題となっている。大関はるかさんはワークショップを中心に、人と人との結びつきを大切にしている。
URL: <http://www.hinodeya-ecolife.com/>

吉村智樹 (平成26年1月26日取材)

会員さん募集！あなたもごみ減の会員になりませんか？

京都市ごみ減推進会議は、つながりや創意から生まれる様々な活動を展開することにより、ごみを減らし、環境を大切にしたいという市民、事業者、行政で取り組む、きつてできる。当会議では、ともに活動する会員を募っています。詳細は、事務局へTEL:075-647-3444



KBS京都 アナウンサー 海平 和

KYOTO?とは「環境にいいことしていますか?」の意味の言葉。

京都から何を発信できるのか、そう思った考えでの今回のコンセプトに、私は京都マラソンがこれから京都の財産として歴史を重ねていく大きな意味合いを感じました。京都の魅力を伝え、京都から日本を、世界を元気にし、環境先進都市京都にふさわしい大会として環境配慮型のマラソン大会を感じてもらおう。その中で私たち1人1人にてできる地球への優しさを問いつけています。例えば15か所ある給水所において、給水はペットボトルではなく紙コップで、そしておいしい京都の水遣水を提供することによる20ペットボトル、約2万本の削減。マイボトルを持っているランナーにはマイボトルに給水。大会で使用する約4万3千本のスポーツドリンクのペットボトルキャップは分別回収し、再資源化することで約320kgのCO2削減。1つ1つは小さなことでも、多くの方が広く集まる大会だからこそ、数字に表れる部分以上にその意味を問いつけることに、大きな意義があったのではないのでしょうか。



冬から春を迎える京都の風物詩となった京都マラソン。京都から全国に!世界に!!もっとももっと様々な京都の元気と優しさを届けたいです。ね。

KYOTO?マラソン」が新たに掲げられました。「DO YOU KYOTO?マラソン」が新たに掲げられました。「DO YOU

海平 和: 京都市出身。2010年 KBS 京都入社。テレビ「京スポ」ラジオ「森谷威夫のお世話になります」などに出演中。

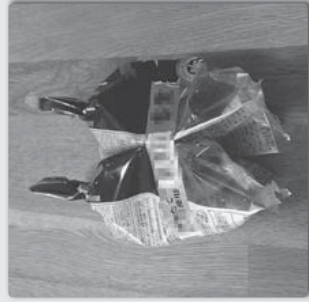
これって、いるかい? 第4回 ソーセージの2パックセット

このコーナーでは、暮らしの中にある「なんとなく使わずに捨てているけど、本当にいるのかなあ?」というものに注目して「これをやめれば、ごみ減るよね」というものを紹介していきます。

突然、私事で恐縮ですが、うちの娘(4歳)は肉及び肉加工製品が大好きです。とりわけソーセージが大好きで、我が家では、スーパードよよく買います。精肉店が入っているスーパーだと、業務用のものを発泡トレイに詰めおいたものがあるので、売ってあればそちらを買おうのですが、写真にあるようなメーカーで袋詰めされたものもよく買います。

2袋セットで、お得なかんじがするのですが、数えてみると1袋に5本くらいしか入っていない!なのになら2袋に分かれている!開封すると賞味期限に関係なく、早目に食べ終わらなければならぬので、小分けになっているのかなとも思うのですが、2袋あわせて10本だと、すぐ使ってしまう。と思うと、やっぱり小分けになっている必要を感じないのです。

そもそもソーセージって、保存食なのに...と思うと、開封すれば早めに食べなければいけない!ということも、生肉ほど早く腐るわけでもなく...。袋がもったいないなあと思うのは私だけでしょうか。



▲1袋の方が使いやすしいし、ごみも減るのになと思うソーセージの2パックセット

(事務局 齋藤友直)

未来フェスタ京都 2013 科学×エコ ~未来は自分でつくる~

「未来フェスタ京都」は、当会議が事務所を置かせていただいての京エココロセンター内の3つの団体「京エココロセンター」「京のアジェンダ21フォーラム」「京都市ごみ減量推進会議」と、敷地を共にしている「京都市青少年科学センター」の4つの団体が協力して開催しているイベントです。3回目の今年度は、「未来は自分でつくる」というサブテーマを掲げ、来てくれる子どもたちが、環境や科学の視点で、未来のことを考えてみるきっかけになるようなブースを設けて、「自分たちが、考えていくんだ!できるんだ!」と思ってもらえるような内容を目指し、準備を進めました。当日はあいにくのお天気でしたが、なんと2,186名の方が



験の流れと、ほとんど同じ手順でリサイクルされ、再生紙として皆さんの手元に戻ってくる。紙は何度も再生できる、貴重な資源であることを聞き、「紙=資源≠ごみ」を実感してもらえたのではないだろうか。



学やまちづくりを考える体験プログラムなども開催していらっしゃいます。

ワークショップはまず、講師の岩田先生の子供時代を想像するところからスタート。「想像」することを体験した後、各自選んだ家電の絵を描き、その中身を「想像」してみます。そして、いよいよ分解へ。

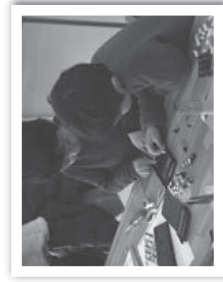
初めてドライバを握った子ども、何度も分解の経験がありそうな子ども、ネジを見つけて回して回してみよう!「え〜!想像したのと全然違った〜」「ネジは外れたけど、ここが引かなかつて、開かない...」など、あちこちで発見の声や、道具や家電と格闘する姿が。みんな本当に楽しそうでした。

最後は、バラバラになった部品を、段ボールの板に貼り付け、作品をつくり、発表してもらいました。素材ごとにグループ分けした子、部品の形を生かしてロボットのようになど、子どもたち、おもろい作品がたくさんできました。

中には、いろいろな金属等が使われていることを確認でき、市等で実施している「小型家電の回収」によって素材ごとリサイクルされ、資源として生かされることや、小さな部品が大きな役割をしていることなどを、分解を通して感じてもらえた、楽しい1日でした。

(事務局 藤田一美)

こわしてつくる!中身を知ろう!



もうひとつのワークショップは、小型の家電製品を分解するワークショップ。中身を知ること、モノへの愛着を深めることや、ものつくりへの関心を高めてもらいたいと企画しました。

事前準備の小型家電集めでは、最近の家電は分解できないようにねじ穴が見当たらないものや、特殊ネジのものが多いなって、子供たちにも身近な時計や、リモコン、電卓などを材料に体験してもらうことにしました。

講師をしていただいた「Motivation Maker (モチベーションメーカー)」さんは、未来のおとな(子供たち)のモチベーションを向上させるための教育プログラムを提供するNPO法人。分解ワークショップ(技術者の体験)だけでなく、科

ごみ減量こそが、おもてなしの基本

エコクッキングで食材の大切さを学ぶ

2月8日（土）午前、今熊野小学校の家庭科室は、活気に満ちていました。ぶりのアラを洗う人、根のついた畑菜を茹でる人…。そこは力石 幸さんの指導で開かれたエコクッキング教室。参加は子どもからシニアまで、20名の地域住民です。だしや茶葉まで使い切ったの調理後、ぶり大根などのメニューを囲んで全員でいただくと「今まで捨ててたもんがこんなに美味しくなるなんて」「これからはちゃんと活用するわ」など、喜びの声が上がります。主催したのは、今熊野学区地域ごみ減量推進会議（以下、今熊野ごみ減）です。8日に引き続き、9日は新熊野神社での「もちつき大会」に連携して東山エコまちステーションが行った資源物回収にも協力。蛍光管・乾電池などの回収をサポートしました。



コンポストで落葉を堆肥化

立ち上げ後、3年。今熊野ごみ減は、エコクッキングをはじめ、多彩な活動に取り組んでいます。今熊野学区は2011年京都市からエコ学区認定を受け、地域のモデルとなる取組を実践してきました。今熊野小学校で行っている



落葉の堆肥化もそのひとつ。2012年10月コンポストを2台設置し、地域の落葉を集め、減量と地域の美化に寄っています。2012年2月から3月「いまえこ講座」を企画推進、「男のエコ料理講座」を2回、「子どものためのエコ工作講座」「冬の省エネ講座」を今熊野小学校を会場に開きました。

京都のエコ活動の牽引役として

阿弥陀が峰を東に配し、泉涌寺を筆頭に名だたる寺社を抱え、陶磁器づくりの拠点でもあった今熊野。京都ならではの歴史や文化に彩られた地でもあります。今熊野ごみ減の中核として動く石井良之会長には、明快な地域の将来像があります。「家族みんなが安全に安心して暮らせる街」



石井会長

「お年寄りが自立して生活していける街」「子供たちの笑い声が聞こえる街」「地域の結束力が強く、支え合える街」などのほか、歴史や文化を大切に、観光客と住民が共生できる街づくりを描いています。

今年4月、今熊野にはエコ先進地域を象徴する教育施設が開設されます。一橋小学校、月輪小学校、今熊野小学校を統合、月輪中学校を合わせ、小中一貫校「東山泉小・中学校」が誕生するのです。注目すべきは環境配慮型の施設となっている点で、元一橋小学校の跡地に建設される新学舎には、木材が多用され、ビオトープ、屋上緑化、太陽光発電、雨水利用、地下空間を利用したクールピットなどが採用されています。今熊野小学校を拠点に活動してきた今熊野ごみ減にとって、大きな弾みになることでしょう。石井会長は「私たちの環境活動を京都市全域へ広げたい」と意気込んでいます。多くの観光客が訪れる京都のおもてなしの基本はごみ減量と環境活動にある、そんな信念が石井会長の瞳に光っていました。

森田知都子（平成26年2月10日取材）